

英語好きを育むための教育的示唆

— 足立区生徒意識調査の分析を通して —

Educational Implications to Help Students to Enjoy Learning English

金子 義隆

KANEKO Yoshitaka

Abstract

The purpose of this study was to investigate how junior high school students in Adachi Ward feel about English learning. A questionnaire consisting of 100 items asking about English learning was administered to 2,488 students from eight junior high schools in Adachi Ward. It was found that the ratio of students who like English is higher than that of a previous nationwide study. On the other hand, the ratio of students who are not good at English is much lower than the national level. The results suggest that the reasons why students like or dislike English have to do with their sense of self-efficacy. They also suggest that grammar-translation is still a favorite activity in English learning. In order to help them feel competent in English, students need a number of successful experiences of communicating in English in their classroom. Therefore, English classes should not be grammar-centered but communication-centered, providing plenty of opportunities for students to engage in communication activities.

1. 研究の背景

今後の日本社会のグローバル化を見据えて、昨今英語教育の重要性はますます高まっている。新学習指導要領（文部科学省，2017）の「外国語」では、小学校から高等学校まで一貫して育成すべき資質・能力を3つの柱に整理した。3つ目の柱に「学びに向かう力・人間性」とあるが、これまでも英語学習に対して積極的な態度の育成を目指してきたが、今回の改訂では、より長期的、自律的な態度の育成を目標としている。つまり、英語教育の早期化・長期化が進むことで英語学習へ向かう力（やる気）の育成がより重要になっていることを意味している。明海大学と英語教育に関する連携協定を結んでいる足立区は英語の習熟に課題を持っている。この課題を解決するには、英語学習に対するやる気を向上させ

ることが大切な要素となるはずである。本研究の目的は、足立区の中学生の英語に対する意識、特に中学校での英語学習、学校外での英語学習、英語学習動機について調査してその実態をつかむことと、得られた知見を基に生徒の英語学習に対する効果的な支援を模索することである。

足立区には35校の区立中学校が存在するが、その中から区教育委員会が英語教育重点支援校たるものを指定している。この重点支援校は学校の状況を見ながら毎年見直されるもので、3つのカテゴリー別に指定される。3つのカテゴリーとは、「基礎学力向上」、「小中連携推進」、「四技能育成」である。2017年度には、これらのカテゴリー別に指定された重点支援校は全部で8校あった。この8校は成績の観点から見ても、上位校もいれば下位校もあり、平均すれば全35校の平均とほぼ変わらないものと考えられている。

2. 研究の方法

前記の重点支援校8校の全学年の生徒計2,488名に対して、自記式マークシート調査を行なった。質問は大きく4つのカテゴリー別に作成した(①小学校の英語学習について;②中学校の英語学習について;③授業外の英語学習について;④英語学習動機について)。生徒は質問ごとの選択肢を選び、マークして回答した。

3. 英語の好意度・得意度の分析

1) 質問：英語は好きですか。

上記の問いの結果が次の通りで、「好き」(29%)と「どちらかというとき好き」(28%)を合わせると57%が肯定的な回答をしていた。昨年度は3校のみの集計であったが、両方を合わせると55%であった。

2) 質問：あなたが英語を好きになった理由は何か。

図1は、上記の「好き」と「どちらかというとき好き」と回答した生徒がその理由として「当てはまる」と選んだ項目を回答者全体数(1,480名)での

割合である。この図から、授業要因が高い割合であることが見てくる。授業の「雰囲気がよく、楽しい」(74%)や「分かりやすい」(73%)は「英語が好き」になる大きな要因であることが分かる。また、先生要因(66%)やテスト要因(63%)も大きい影響がある。「英語を使って、コミュニケーションをする機会がある」という理由が59%も占めることで見てくることは、授業の中での「コミュニケーション活動」が多くの生徒に好まれており、それが「英語が好き」になる大きな要因の一つになっていることである。

3) 質問：あなたが英語を好きでなくなった理由は何ですか。

図2が示すように、「文法が難しい」(73%)が最大の要因である。「テストでいい点(成績)が取れない」(59%)ことも2番目に大きな要因であり、「英単語を発音したり、スペルを書いたりできない」(52%)や「授業が分からない」(50%)、「英語そのものが嫌い」(50%)、「発音が難しい」(49%)、「外国文化に興味を持てない」(41%)と続いている。「授業の雰囲気が楽しくない」(33%)や「英語を学ぶ必要性が分からない」(32%)も無視できないほどの割合である。

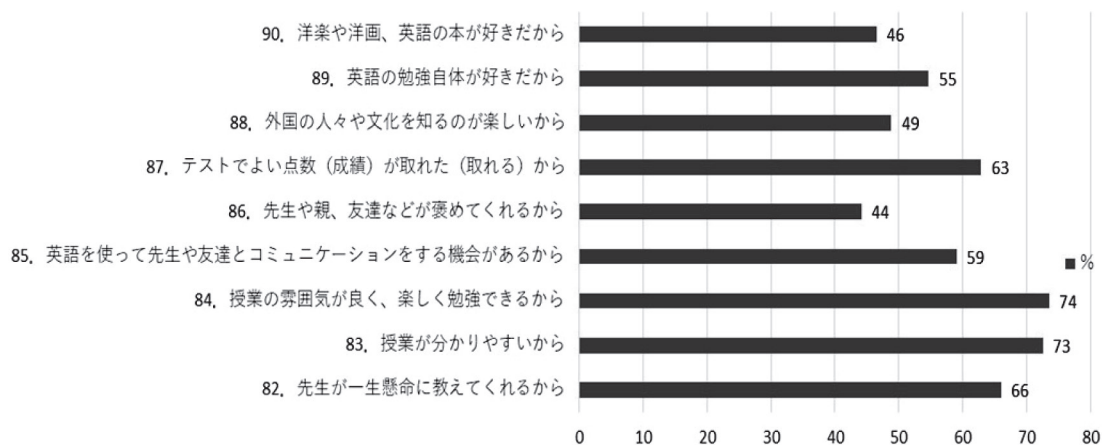


図1 英語を好きになった理由

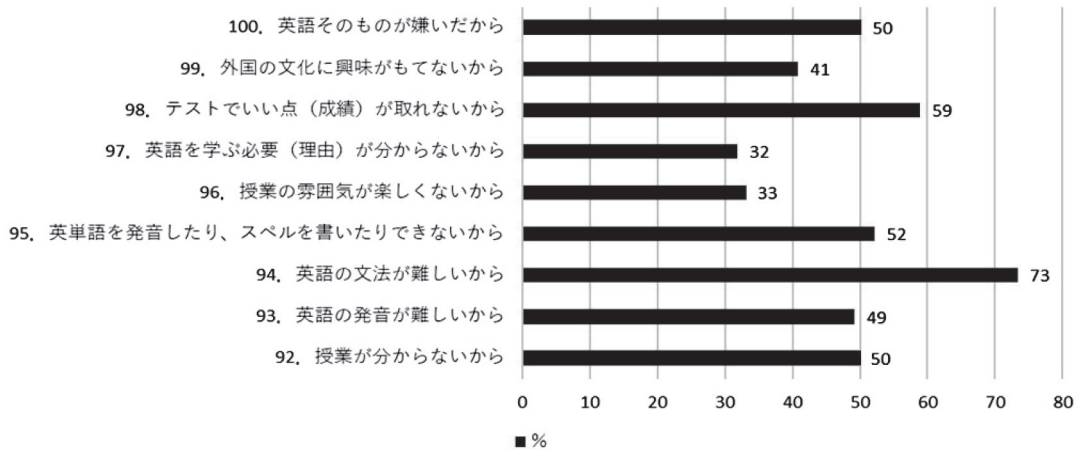


図2 英語を好きでなくなった理由

4) 質問：英語は得意ですか、苦手ですか。

「得意」(14%)と「やや得意」(30%)を合わせると44%となる。Benesse(2014年)が全国規模で中学生(3,081名)に行った調査だと「得意」と「やや得意」を合わせて56%という結果であったが、それと比較するとこの数値はかなり低いと言わざるを得ない。

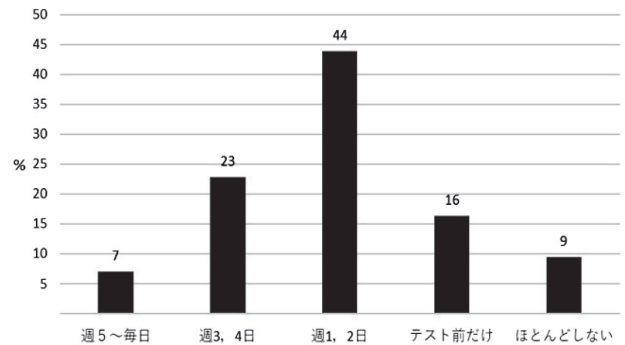


図3 1週間の勉強日数

4. 英語学習頻度と量

英語習得には英語に触れること(つまり、インプットを受け、アウトプットを行うこと)が絶対的に必要であることは広く認められた概念であるが、インプットやアウトプットの頻度や量はその習得の成功に大きな影響を与える。そこで、英語学習の頻度と時間数に着目した。

5) 質問：授業以外で普段、週何日程度英語を学習しますか(塾や英会話、家庭教師なども含む)。

図3を解釈するために、「週5～毎日」の回答と「週3, 4日」を「よく勉強する群」とし、「週1, 2回」を「ある程度勉強する群」、「テスト前だけ」や「ほとんどしない」を合わせて「ほとんどしない群」の3つのグループに分けると、「よく勉強する

群」(30%),「ある程度勉強する群」(44%),「ほとんどしない群」(25%)となり、3つの山を形成する。つまり、大きく3つのグループ(「よく勉強する群」(30%),「ある程度勉強する群」(44%),「ほとんどしない群」(25%))が存在することが見てくる。

上述した得意度と好意度による英語に対する認識別に「得意好き群」(n=931人),「得意嫌い群」(n=106人),「苦手嫌い群」(n=842人),そして「苦手好き群」(n=453人)の4つにグループ化した。上記の英語学習の頻度に関する3つのグループの内訳を調べるために、英語の認識別4グループとクロス分析を行った。その結果が図4が示す通りである。数字はそれぞれのグループの中での割合を示している。例えば、「5日以上」の回答を見ると、「得意好き群」11%とあるが、これは「得意好き群」

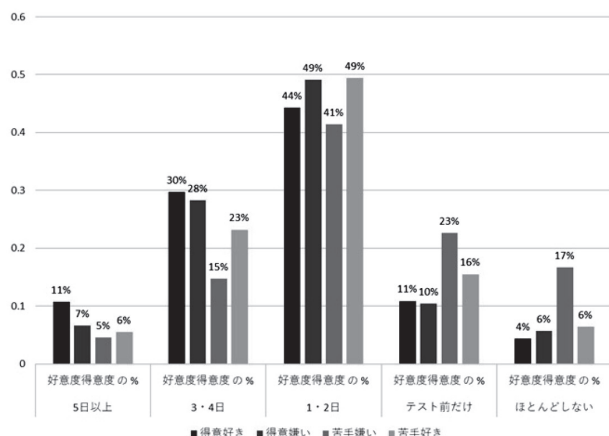


図4 英語の認識別グループと1週間の勉強日数

の全体の11%が「5日以上」を選択しているという意味である。

図4を見ると、「得意好き群」が明らかに勉強する頻度が高い。「得意好き群」で「ほとんど（勉強）しない」に当てはまる数は非常に少ない（15%）。次に頻度が高いグループが「得意嫌い群」である。それとほぼ同じ水準なのが「苦手好き群」である。「苦手嫌い群」は「ほとんどしない群」に40%が当てはまり、この群の最大派である。つまり、「よく勉強する群」には「得意好き群」や「得意嫌い群」、そして「苦手好き群」の順で多くみられ、反対に「ほとんどしない群」には「苦手嫌い群」が多くみられる。これは、生徒が英語を「得意」と認識することと勉強の頻度は関係していることが示唆されている。また、得意度だけでなく好意度の認識も違いを生み出しているようである。つまり、「苦手」であっても「好き」ならば英語を頻繁に勉強しているのである。これらの結果は全て統計的に見ても、1%水準で有意であることが確認できた。つまり、グループ間には99%以上の確率で偶然ではない違いを生み出す何かが存在している。その何かは英語に対する「得意度」と「好意度」と言えるだろう。

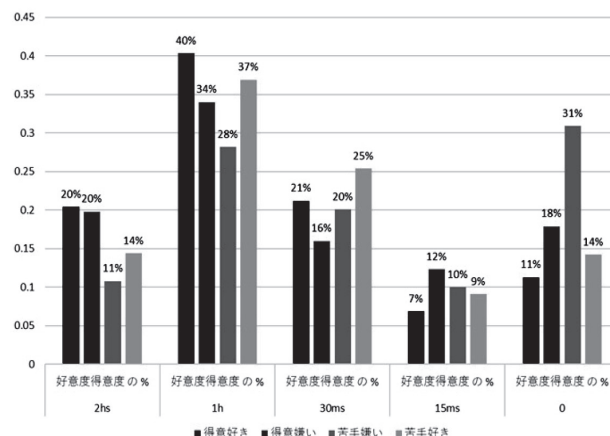


図5 英語の認識別グループと1日の平均学習時間

6) 質問：授業以外では、1日平均どの程度英語を学習しますか（塾や英会話、家庭教師なども含む）。

さらに、学習頻度と同様に学習量も重要な要素であるので、以下に分析した。前記の学習頻度で現れた3つのグループがここにも存在することが分かる。「2時間くらい」と「1時間くらい」を合わせて「よく勉強する群」とすると、合計51%となる。「30分くらい」を「ある程度勉強する群」とすると21%となり、「15分」と「ほとんどしない」を合わせて「ほとんどしない群」は29%である。しかし、学習量においては学習頻度とは違い、グループ間の差が大きい。特に、「よく勉強する群」（51%）と「ある程度勉強する群」（21%）の差が大きい。これは一見、学習頻度と比較して「よく勉強する群」が学習量においては比較的大きい割合で存在すると解釈することもできるかもしれない。しかし、学習の頻度と量を単純に比較することはできない。

そこで、英語の認識別4グループとクロス分析を行い、学習量のグループ間の比較を行なった。「2時間くらい」と「1時間くらい」を合わせて「1時間以上」とした場合、「得意好き群」では60%が、「得意嫌い群」では54%が、「苦手好き群」では51%が回答している。一方、「苦手嫌い群」では「1時間以上」と回答した割合は39%と少なくなっている。反対に、「15分くらい」と「ほとんどしない」

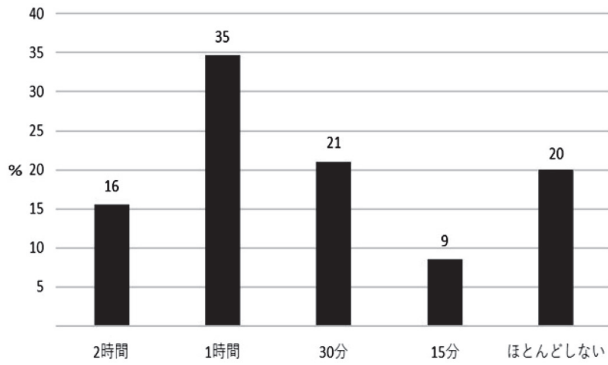


図6 1日の平均学習時間

を合わせて「ほとんどしない群」においては、「苦手嫌い群」の41%がここに該当しており、英語の認識別グループでは最大値である。苦手で嫌いと4割はほとんど勉強しないことが分かる。

ここまでの結果を以下にまとめてみる。英語に対する認識の違いは、英語の学習頻度と学習量に大きく影響を与えている。つまり、「得意」と感じているかどうか、また「好き」と感じているかどうかは、学習頻度と量に関わってくるということである。英語を「得意」と感じている生徒は、英語の学習により頻繁に、そしてより多くの時間取り組む傾向がある。また、英語を「好き」と感じている生徒も同様である。図7は、「得意度」と学習頻度、また図8は「好意度」と学習頻度をグラフにしたものである。これらのグラフは上述した主張を裏付けるものである。カイ2乗検定により、統計的にも有意であることを確認した。一方、英語が「苦手嫌い群」は英語学習に取り組む頻度も量も少ないこともわかった。つまり、「苦手嫌い」だと英語学習に絶対的に必要な学習時間が少なくなる。当然の結果として、英語の習得は進まなくなり、さらに英語に対する否定的な感情を持つことにつながり、「負のサイクル」の中に入ってしまう危険がある。この「負のサイクル」から抜け出させる方策が必要である。

では、どんな方策が考えられるのか。英語を得意とするには、やはり「学習の頻度や量」が必要になってくる。勉強しないで得意になれるほど語学の

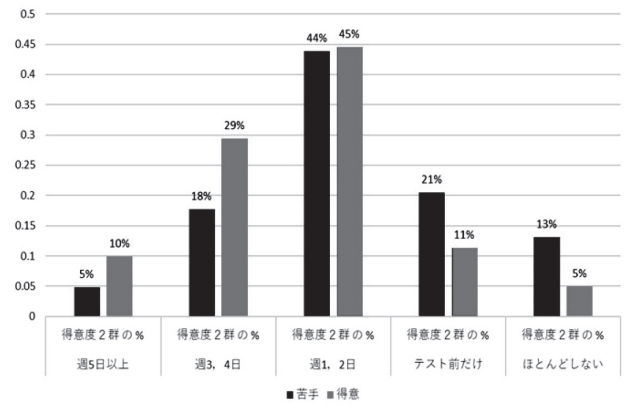


図7 得意度と学習頻度

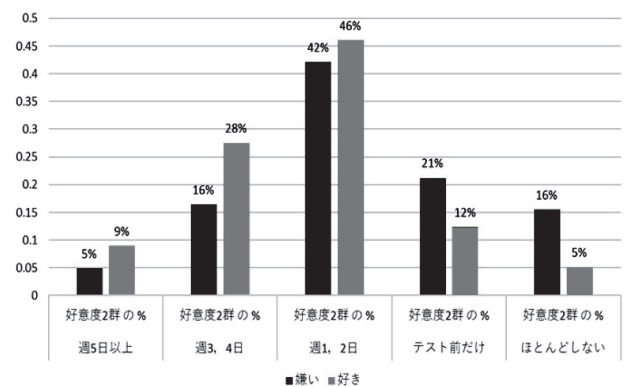


図8 好意度と学習頻度

習得は甘くない。では、どうやって「学習の頻度と量」を増やさせるのか。その一つの方策は、「英語を好き」にさせることかもしれない。図7と図8が示すように、「得意度」のみならず、「好意度」と「学習の頻度と量」には正比例関係が認められる。生徒は得意でなくても、「好き」であれば、英語学習により頻繁により多く時間をかけて取り組むのである。そうやって英語学習に取り組むことによって、やがて英語を「得意」とすることができると思えられる。

5. 「英語好き」・「英語嫌い」の要因

英語を「好き」にさせる方策はあるのか。この方策を考えるには学年ごとにデータを分析してみた。以下に、学年ごとの英語の好意度に関するデータを比較した(表1)。「好き」と「どちらかという好き」

を合わせた割合は、1 学年で 62% に上り、これは学年間で最大値である。2 学年で 51% に落ち込み、3 学年で 57% と再び上昇している。問題は、この現象がこの年だけの傾向なのかという点である。今回の調査対象者の数や対象学校数、地域環境の均一性を考慮すれば、この現象は今年度だけのものではなく、ある程度一般化できると考えられる。そうすると、中 1 と中 2 の間に見過ごせない何かが起こったと考えられる。特に、この調査を実施した時期は 10 月であり、後期の始まった直後ということを考えると、中 1 後半から中 2 前半に多くの生徒を「英語嫌い」にする何かが存在したといえる。

表 1 学年ごとの「英語好き群」の割合

	1 年生	2 年生	3 年生
「好き」・「どちらかという 好き」の合計	62%	51%	57%

「英語好き」の理由を学年ごとに比較してみた。全学年で授業の「雰囲気がよく、楽しい」と「分かりやすい」が上位理由であり、どの学年でも「授業要因」が一番大きい影響を与えていることがわかる。しかし、学年間に大きな差があるようには見られない。その後を追うのが、「先生要因」と「テスト要因」である。これらの要因もかなり高い割合で選択されている。

次に、各学年の英語が嫌いな理由に着目した。どの学年も「文法が難しいから」が大きな要因であることがわかる。これは先行研究の Benesse (2014) の調査や金子 (2017 年) でも最大の理由は「文法」であった。このことから、中 1 後半から中 2 前半に「英語嫌い」を引き起こす最大の要因は「文法」と言えるのではないだろうか。つまり、この時期に導入される文法がよく理解できないがために「英語嫌い」になっているようである。科目の性質上、一度つまづいてしまうとその後理解が追いつかずにつまづいてしまうという悪循環に陥りやすい。こういう理由で、この時期を境にして「英語嫌い」となる

生徒が増えると推測できる。

特筆すべきは、1 学年だけ「英語を学ぶ必要（理由）が分からないから」が「文法」を上回ってかなり高い値を示しているが、他の学年ではこの理由はあまり高くない（1 学年：74%；2 学年：37%；3 学年：31%）。これはどう説明できるだろうか。恐らく、中 1 のこの時点（中 1 後半直後）までは、小学校時代も含めてあまり難しい文法導入はなかったため、文法は英語学習の障壁にならなかったと考えられる。しかし、この時点以降、より複雑な文法が導入され始めるとそれまでの授業と変わってしまうと考えられる。それまではどちらかという会話や歌、ゲームを中心とした授業であったのが、それ以降は文法理解が中心になってしまうわけである。これは、2, 3 年生が英語嫌いの最大の理由に「文法が難しい」を挙げている裏付けになる。もう一つ言えることは、英語の必要性の認識はかなり重要な要素だということである。つまり、英語を勉強する理由や必要性を見出せないと学習に取り組む気にならないのだと考えられる。中学 1 年生や小学生であっても、英語学習の意義を見出せるような指導や取組の必要性を感じさせる。

また、2・3 年生で高い値を示しているのが「テストでいい点（成績）が取れないから」である（1 学年：48%；2 学年：62%；3 学年：65%）。他にも「授業が分からない」や「英単語を発音したり、スペルを書いたりできない」「発音が難しい」が上位に挙がる。文法を筆頭に、授業やテストが「分からない」「できない」は英語嫌いを引き起こす上位の原因となっている。

では、なぜ「分からない」や「できない」が英語嫌いを引き起こすのかということ、一つには自己効力感を感じることができないからだと考えられる。Bandura (2001) の自己効力感理論によれば、自分には課題を遂行できる能力があると信じている場合、継続して課題に取り組むことができるが、人は向き合う課題が自分の能力を超えていると感じると

やる気を失くすという。つまり、できると思えない課題については積極的に取り組まないのである。

生徒たちはどうやって「自分にはできる、できない」を判断しているのだろうか。それは、過去の経験が大きな要因になっていると考えられる。生徒は初めて英語を勉強するとき以外、必ず過去の学習経験を持って教室にやってくる。過去の英語学習で十分な成功体験を培って来られなかった場合、英語に対して無気力感を感じ、積極的な行動に移すことができないのであろう。帰属理論によれば、人が過去の成功や失敗を帰属させるものとして7つ挙げているが、個人の能力のように自分の力では変えられないものに失敗の原因を帰してしまうと、その後の行動に対する動機に悪影響を与えてしまう（Graham, 1994）。だから、教師などの他者からの肯定的な励ましは意味があるだろう。また、失敗の原因を能力に求めるのではなく、努力に求めるように指導すべきであろう。なぜなら、能力は比較的不可変だと考えられているが努力は可変なものだからである。

上述したように、学年別に英語の好意度を数値化した。そこでは、中1後半から中2前半にかけて「英語嫌い」が増えていることが見えてきた。そこで、この点をより明確にするために、以下の質問の回答を分析した。

7) 質問：英語が好きになったのはいつ頃ですか。

この質問に対する3年生（n=842）の回答を分析してみた。3年生が唯一小学校と中学3年間を経験している学年であるので、3年間を通した変化を表していると考えられるからである。この結果を見ると、中1前半が一番多く（28%）、中学入学前がそれに次いで多い（29%）。この2つを合わせると「英語好き」と回答する生徒の6割を占めている。これを見ると、いかに英語学習の初期段階が重要か見えてくる。しかし、その後も中2前半（12%）や中3前半（11%）で「英語好き」が増えていることが分かる。これらは、学年が変わったタイミングで

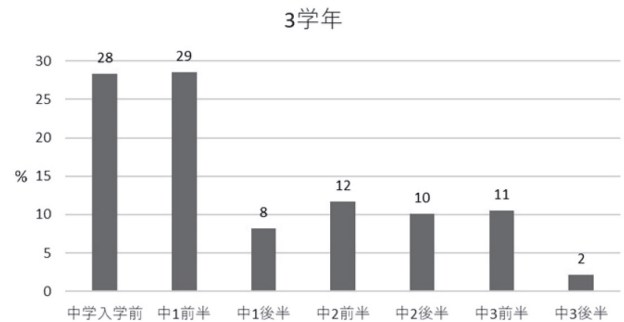


図9 3年生が英語を好きになった時期

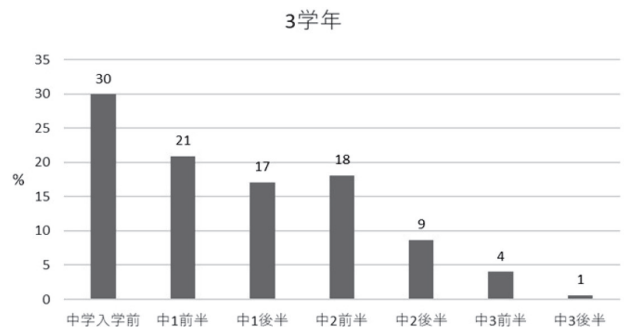


図10 3年生が英語を嫌いになった時期

も英語の好意度が変わりえることを示唆している。

8) 質問：英語が嫌いになったのはいつ頃ですか。

この質問に対して、やはり小学校と中学3年間を経験している中学3年生が分析対象としてふさわしい。英語嫌いになる時期では、中学入学前が最大値（30%）である。それに次ぐのは中1前半（21%）である。上述したが、多くの生徒が英語を「好き」になる時期もこの2つの期間である。いかにこの2つの期間が大きな影響を与えているかが見えてくる。そして、中1後半（17%）と中2前半（18%）にも英語嫌いが増えることが分かる。これは、学年ごとの英語好意度について「中1後半から中2前半に何かが起きている」と先に述べた結果と合致している。そして、この結果から、どうやら中1後半と中2前半の両方に該当するようである。

6. 学校外での英語学習

次に、授業中と授業外での生徒の言語活動に注目

してみた。生徒の英語学習の内容を詳しく分析するためである。

9) 質問：授業中、次のようなことはありますか。

授業中によく行われている活動を見ると、「教科書の音読」や「教科書の読解」が一番多く、次いで「リスニング活動」や「単語や基本文の練習」となっていて、この4つの活動が突出して多い。その次に来るのは、「単語の意味調べや本文を訳す」ことや「先生と英語でコミュニケーションすること」、「ペアやグループで英語でコミュニケーションすること」である。前記の活動は全て学習指導要領でも規定されているもので、授業で積極的に行われるべき活動である。そのような活動が授業の中心になっているようだ。

「辞書を使って単語について学ぶ」はあまり行われていない。上記の「単語の意味調べや本文を訳す」の中に「単語の意味調べ」があるが、「辞書を使って単語について学ぶ」があまり行われていないことから、「単語の意味調べや本文を訳す」活動は「本文を訳す」ことが中心になっているのかもしれない。学習指導要領には「訳す」活動の記載はない。本文理解を促すために「訳す」ことを行っているのかもしれないが、「訳す」以外の活動で本文理解を進める方法を授業で行なっていく必要があり、これは喫緊の課題と言えそうである。

10) 質問：授業以外ではどのような英語の勉強をしていますか。

授業以外では、「学校で配られたワークをする」

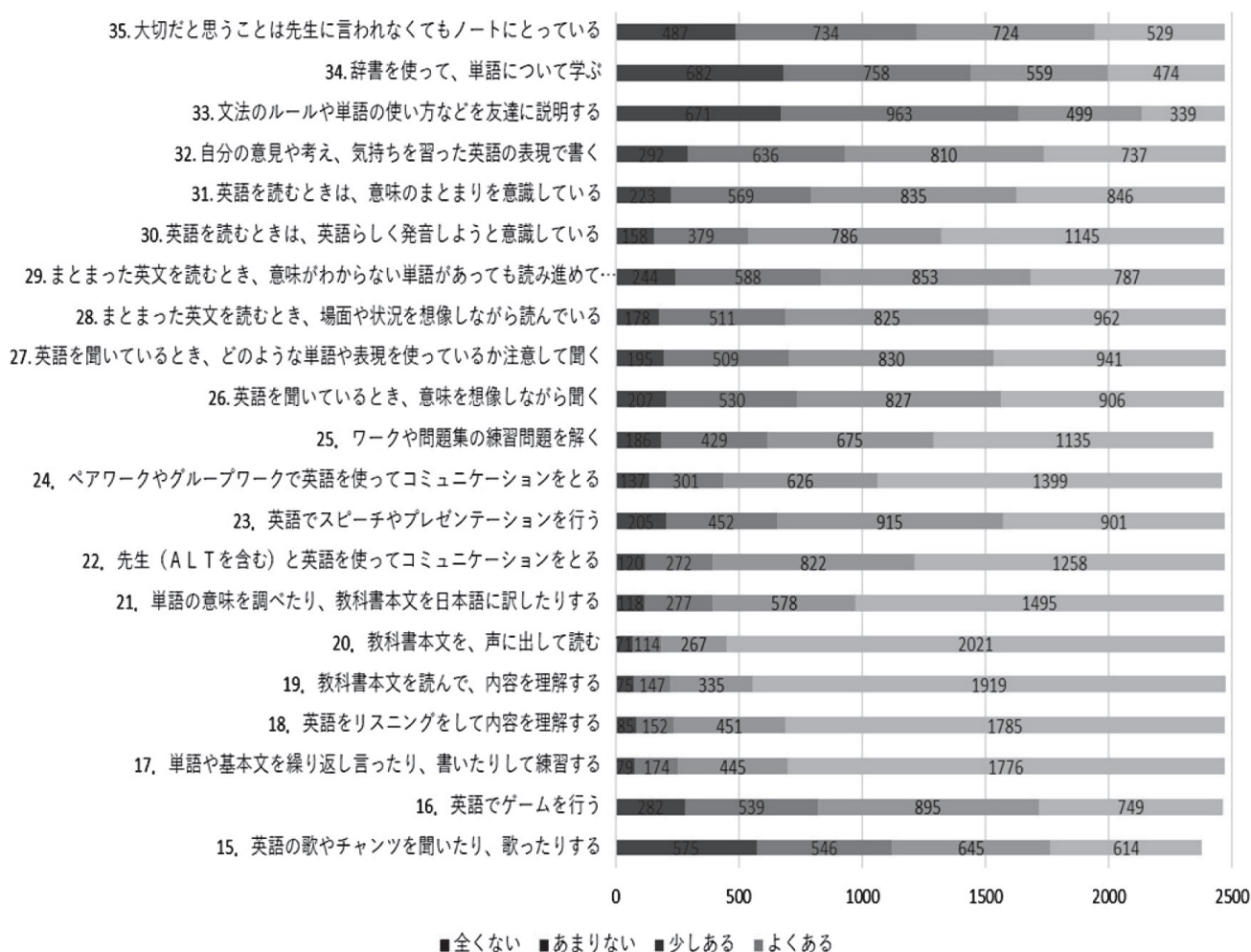


図 11 授業中の言語活動

や「教科書本文を写す」や「単語の意味調べをして何度か書く」、「教科書の基本文を覚える」ことがよく行われている。また、「教科書の音読」や「発表の練習」、「塾などの勉強」、「本文の暗唱」と一緒に、「教科書本文を訳す」こともよく行われている。英語の習得には、授業の復習も含めて英語を言ったり書いたりする反復練習が必ず必要である。そして、単語や基本文、時には本文を覚えることも大切である。このような活動が行われていることは英語力の向上につながっていると考えられる。

さらに、英語の「得意度」と「好意度」との関係を調べるために、英語の認識別の4グループとのクロス分析を行なった。その結果、「得意好き」群は基本的にどの活動もよく行なっているが、「苦手嫌い」群はどの活動も行なっている割合が少ない。カイ2乗検定を行い、統計的有意差を確認した。例外として、「英語で日記を書いたり、あるトピックについて自分の考えを書いたりする」や「テレビやラジオ、インターネットの英語講座（教材）を利用する」、「中学生向けの英字新聞や英語で書かれた本を読む」の活動に関しては、統計的に有意差が表れな

かった。

4グループ間で顕著な差が見られた活動を以下に紹介する。「学校で配られたワークブックやワークシートの問題を解く」ことや「単語の意味調べをして何度か書いて練習する」こと、「教科書本文をノートに写す」こと、「教科書本文を日本語に訳す」こと、「教科書本文を声に出して読む」こと、「教科書書に出ている基本文を覚える」こと、「教科書本文を覚える」ことである。これらの活動を「得意好き群」が一番よく行っており、反対に「苦手嫌い群」はあまり行っていない。

ここに「教科書本文を日本語に訳す」活動が入っているが、だからといって「訳す」ことが効果を上げているとは言い切れない。もちろん、英語を全く勉強しないことに比べれば、英語を「訳す」ことをしたほうがいいだろう。しかし、「訳す」ことが効果的かというとは別の問題である。

7. 英語学習動機

最後に、英語学習動機に関して分析した。「得意

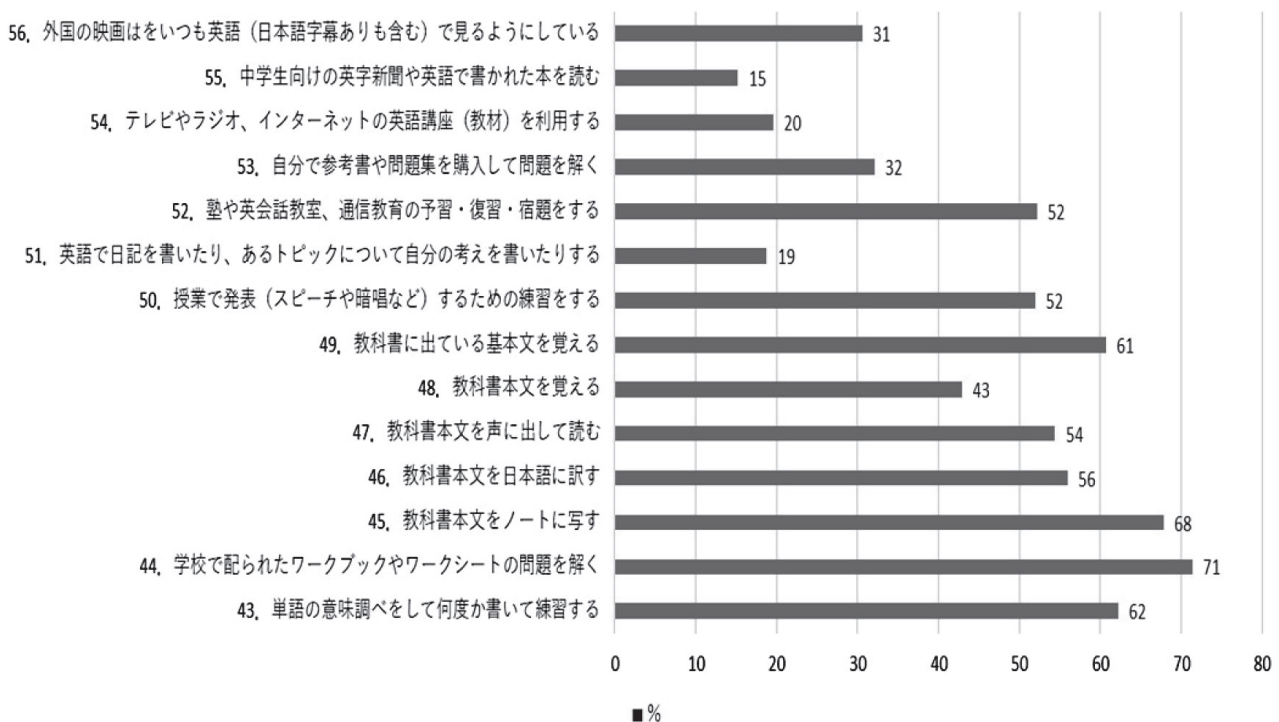


図 12 授業外でよく行う言語活動

度」と「好意度」に関する英語の認識別グループ間において、英語学習に対する意識に違いがあるのかを解明することが目的である。英語学習動機づけの先行研究を基に英語学習に対する意識を概念化した。概念化するために以下の12タイプの動機を利用した。その動機と概念化した意識は以下の通りである。「内発的動機」(57, 60)と3つの「外発的動機づけ」である「外的調整」(71),「取入れの調整」(75, 78),「同一視的調整」(73),「理想のL2自己」(59, 67),「学習環境」(76),「自己効力感」(74, 77),「国際的指向性」(63, 64, 66,),「コミュニケーションへの意欲」(68, 70, 79)「英語へのあこがれ」(58, 72),「道具的動機づけ」(61, 62, 65, 69)と23個の意識を概念化した(Deci & Ryan, 1985; Dornyei & Ushioda, 2011; Kaneko & Otoshi, 2012; Yashima, 2009)。

「よく当てはまる」と「少し当てはまる」が最も多いのが「英語のテストでいい点数をとりたい」である。ほとんどの生徒に当てはまる。次いで、「英語を話せる人にあこがれる」である。「英語の勉強は将来役に立つ」や「英語を話せるとかっこいい」,「勉強すれば、英語はできるようになる」,「今、英語を勉強しておかないと将来後悔する」が多くの生徒に当てはまる。「英語ができるようになって、いい高校や大学に進学したい」や「様々な国を旅行したい」もかなり多い。反対に、「親や先生が言うので仕方なく英語の勉強をしている」や「外国の高校や大学に留学したい」,「自分には英語を身につける能力がある」,「友達が勉強しているので刺激や影響を受ける」という意識はあまりない。

英語の認識別4グループとクロス分析をしてみると、より詳細が見えてきた。図13は、意識別に4グループの「よく当てはまる」と「少し当てはまる」の合計を各グループ内の割合で表したものである。全体を見渡せばわかるが、「得意好き群」はほとんどの意識でその他の群よりも高い数値を示して

いる。「英語のテストでいい点数をとりたい」という意識においては「得意好き群」はほぼ100%の生徒が当てはまる。しかし、「苦手嫌い群」でも80%近くが当てはまる。つまり、「得意度」や「好意度」は関係なく、ほとんどの生徒に当てはまる意識だと言える。実は、「苦手嫌い群」がここまで高い数値を示す意識は他にはなく、他の意識に関しては、総じて他の群よりもかなり低い。特に「得意好き群」とはかなり差が大きい。唯一の例外が、「親や先生が言うので、仕方なく英語の勉強をしている」という意識で、「苦手嫌い群」が一番高い数値を示している。これは影響力のある他者の圧力によって英語の勉強をしていることを示しており、自ら進んで行っていないことがわかる。逆に「得意好き群」はほとんどの生徒が当てはまらないと回答していることから、他者の影響でなく自律的に取り組んでいることが見えてくる。

「得意好き群」の特徴は、「英語は将来役に立つ」や「勉強すれば英語はできるようになる」,「英語を話せる人にあこがれる」,「英語を聞いたり、話したりすることは楽しい」,「英語学習は楽しい」,「英語が話せるとかっこいい」,「今、英語を勉強しておかないと将来後悔する」という意識を90%前後の生徒が持っている点である。さらに、「英語ができるようになって、いい高校や大学に進学したい」という意識も80%を超える。他グループに比べて他の意識においても高い数値を示している。これは、「得意好き群」は多面的に動機づけされていることがわかる。決して「英語のテストでいい点を取りたい」だけでなく、英語を学習する多種多様な理由を持っているのである。

一方「苦手嫌い群」の特徴は、上述したように「英語のテストでいい点数をとりたい」という意識の他に強い意識は持っていない。むしろ、意識の低さがいくつかの点で際立っている。特に低いのが「自分には英語を身につける能力がある」と「外国の高校や大学に留学したい」,「将来、英語を使って

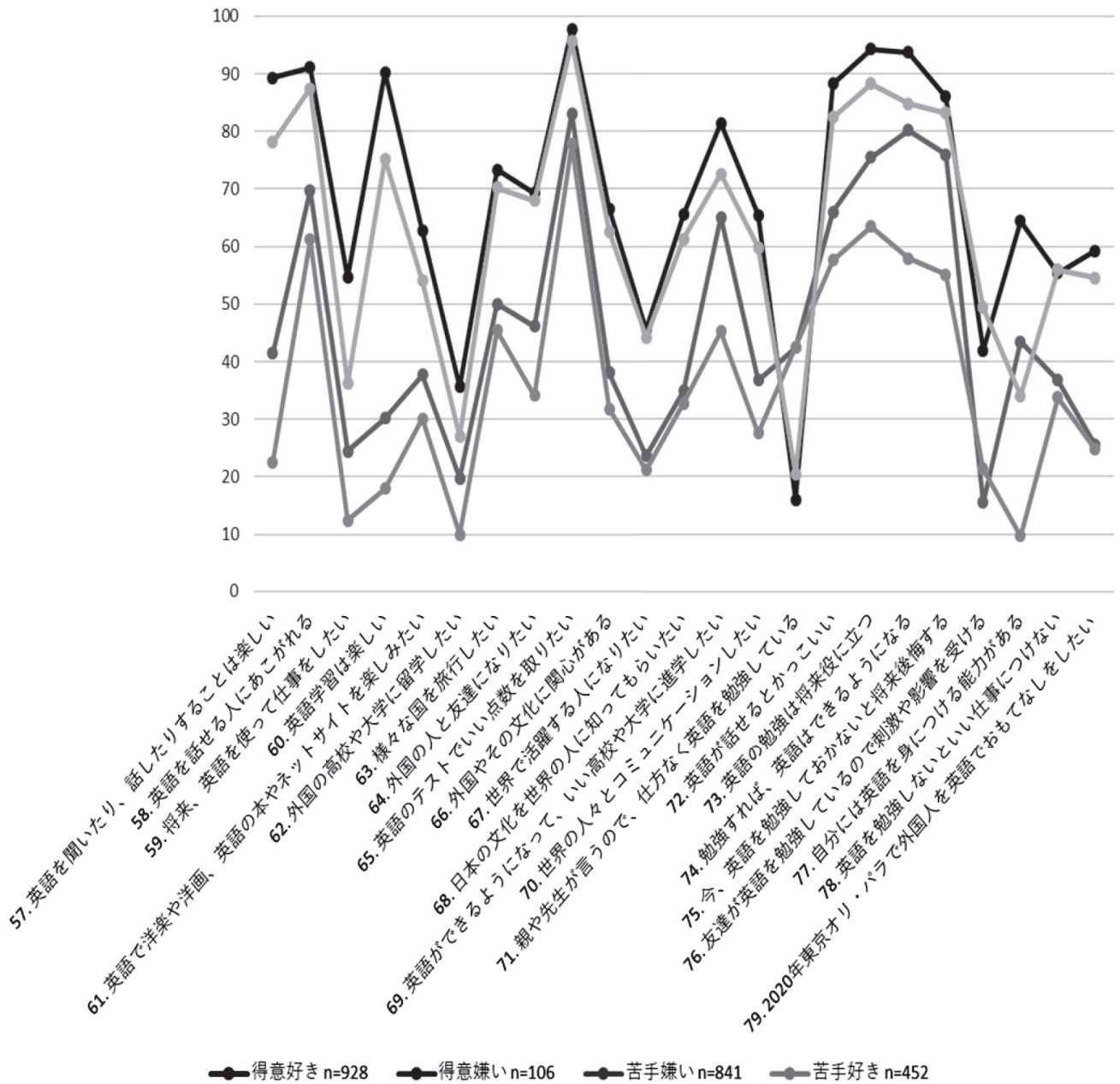


図 13 英語の認識別グループごとの英語学習に関する意識の割合

仕事をしたい」という意識である。「自分には英語を身につける能力がある」という意識が低いと、英語学習への動機づけが難しくなる。なぜなら、上述したように人は「やってもどうせできない」と感じていることに対して、やる気は起こらないからである。これは「学習された無力感」(Learned helplessness)という意識で、過去に英語に対して失敗体験が積み重なると自己効力感を感じることができず、過去の学習体験を通して自分自身の英語に対す

る無力感を学んでしまったと言える。これは上述した帰属理論によれば、間違った原因帰属をしてしまっているといえる。彼らに対しては、成功体験の積み重ねや教師や周りからの励ましも必要である。

「苦手好き群」は、ほとんどの意識で「得意嫌い群」を数値で上回っており、「得意好き群」と差がない意識も多い。しかし、唯一大きく違う点は、「自分には英語を身につける能力がある」という意識で「得意好き群」や「得意嫌い群」よりも数値が

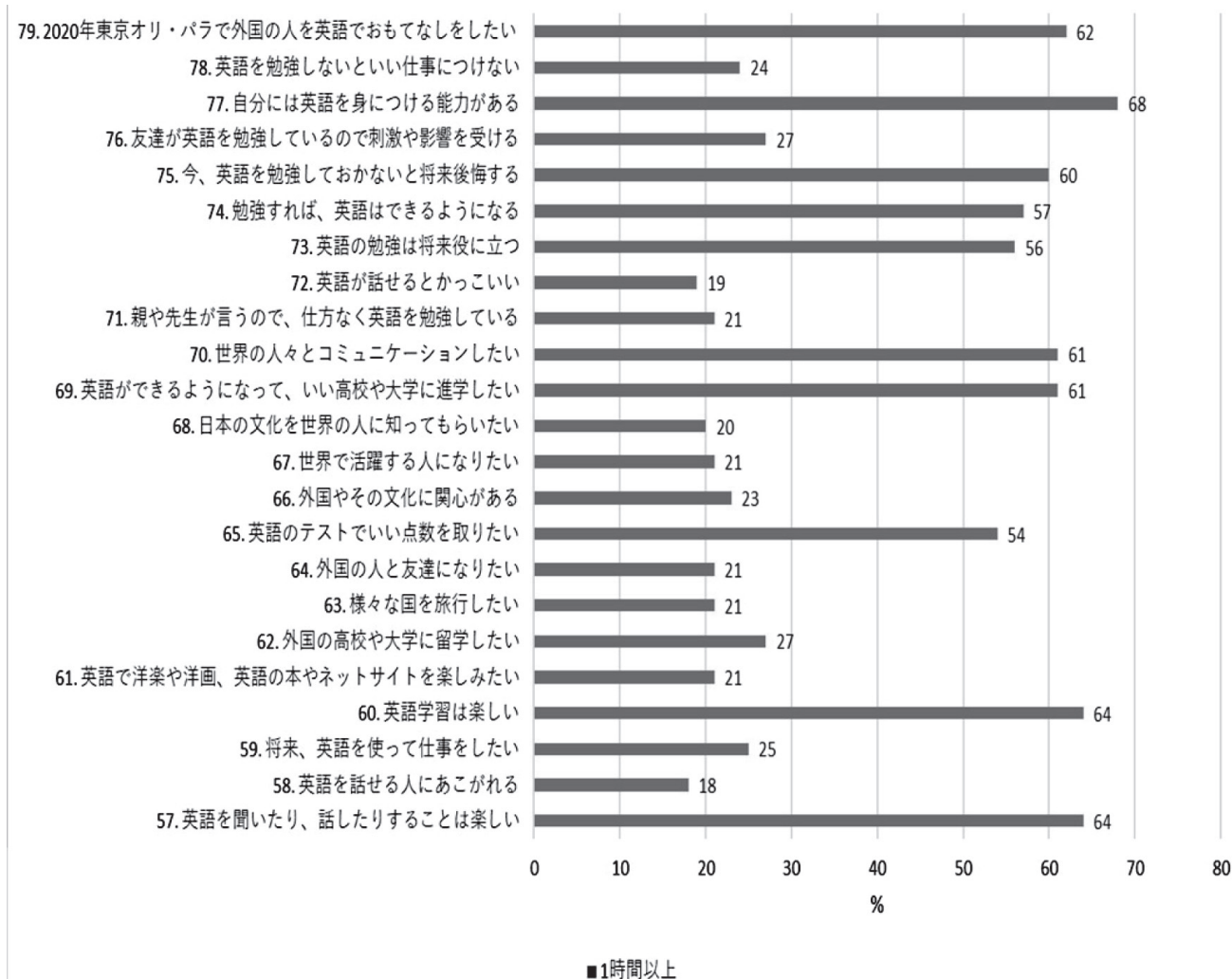


図 14 英語学習に関する意識のカイ 2 乗検定と残差分析

低い。これは「苦手好き群」が「苦手嫌い群」と同じように自己効力感を感じることができていないからといえる。「苦手好き群」が「自分には英語を身につける能力がある」という意識において低くても、他のタイプの動機を持っていることがわかる。多くの動機を持っているがために「苦手好き群」は「苦手嫌い群」よりも学習の頻度も量も多いのであろう。

問題は、動機のタイプによって学習量は変化するかである。このことを解明するために、カイ 2 乗検定後に残差分析を行なった。まず、英語学習の各意識と勉強時間（1 時間以上）とのクロス分析を行った。各意識において「よく当てはまる」と回答した生徒のうち「2 時間くらい」と「1 時間くらい」

を合わせて「1 時間以上」勉強するとした生徒の割合を算出した。さらに特徴的な違いだけを浮き上がらせるために、残差分析を行なって特徴的だと言える数字だけを残した。その結果、図 14 の結果が得られた。「1 時間以上」勉強する生徒の割合が多い意識は「自分には英語を身につける能力がある」で、この意識について「よく当てはまる」と回答した生徒の 68% が 1 時間以上勉強している。このことは、この意識を持っていると学習時間に好影響をもたらすことを示唆している。同様に、「英語を聞いたり、話したりすることは楽しい」や「英語学習は楽しい」という内発的動機も学習時間につながっている。また、「2020 年東京オリ・パラで外国人を英語でおもてなしをしたい」や「世界の人々とコ

コミュニケーションしたい」,「英語ができるようになって, いい高校や大学に進学したい」,「今, 英語を勉強しておかないと将来後悔する」,「勉強すれば, 英語はできるようになる」,「英語の勉強は将来役に立つ」などの意識も高い割合で勉強時間につながっている。

8. 考察及び教育的示唆

今回の意識調査の分析を通して, 見えてきたことと教育的示唆を以下にまとめた。

- ① 「英語好き」と答える生徒は全学年で57%で, 1学年は62%になる。Benesse (2012) の全国規模調査(中1:57%)と比べても多い。しかし, 英語を「得意」と答える生徒は全体で44%であり, Benesse (2014) の全国規模調査(56%)と比べてかなり低い。つまり, 足立区中学生に「英語好き」は全国並み以上に存在するが,「得意」だと感じられるほど英語に自信を持ってない生徒が全国と比べて多いことがわかる。
- ② 英語学習の頻度と量に関しては,「よく勉強する群」と「ある程度勉強する群」,そして「ほとんどしない群」の3つに大別できる。特に,「ほとんどしない群」への対応が急務である。「得意度」と「好意度」に関する認識別4グループとのクロス分析から, 英語学習の頻度と量において,「得意」と感じている場合と「好き」と感じている場合では, 両者に違いはないことがわかった。このことから,「得意」にするには英語学習の頻度と量を向上させる必要があるが, そのためには英語を「好き」にさせることがカギとなりうる。
- ③ 英語を好きになる最大の要因は「授業」である。授業が「分かる」とか「雰囲気良く, 楽しい」ことが英語好きにさせることができる。いかに授業を分かりやすく, 楽しいものにする

か教師はいつも配慮しなくてはならない。では,「分かる」ためにはどうしたらよいか。この方策を考えるためには授業の「何が」分かるのかを考える必要がある。「授業が分かる」とは何か。授業の「内容」が分かることであろう。中学の場合, 検定教科書を授業の中心に置いていることがほとんどだと考えられるので, 内容とは教科書であり, 教科書の理解がとても大切だと言える。教科書にはテキストの読解もあれば, リスニングも含まれるため, 教科書を読んだり, 聞いたりして理解できることがここで生徒が求めていることだと言える。しかし, テキストを理解するとき語彙や表現の理解と同時に必ず取り上げられるのが「文法」ということになるだろう。文法理解はどうしても避けられない課題である。

しかし, 現行学習指導要領(文部科学省, 2008)でも新学習指導要領(文部科学省, 2017)でも文法は「コミュニケーションを支えるもの」として指導することが期待されている。あくまでも文法は「コミュニケーションを支えるもの」であり, 中心は「コミュニケーション」である。テキストの読解にしてもリスニングにしても, コミュニケーションの観点からいう内容理解とは,「概要」や「要点」の理解であり, コミュニケーションの目的に応じた「必要な情報」の理解である。このようなことが「リーディング」や「リスニング」を通してできることが求められているのであり, 学習指導要領でも明記されている。こういうわけで, 授業における理解活動では, まさにこれらの理解を中心とするべきである。

- ④ 中1後半から中2前半にかけての文法指導には特に注意を払わなくてはならない。この時期に英語嫌いが増えるからである。英語嫌いになる最大の理由は,「文法」である。文法が授業の中心になっていると,「文法が理解できない」

イコール「英語ができない」となり、英語嫌いを助長してしまう。文法はあくまでも「言語活動と効果的に関連付けて指導すること」が望まれている（文部科学省，2017）。授業は生徒の言語活動が中心であるべきであり，言語活動においてコミュニケーションを円滑に進めるための助けとなるように指導することが大切である。英語好きの理由の一つに，「英語を使ってコミュニケーションする」がある。多くの生徒は英語を使ってコミュニケーションすることが好きである。コミュニケーション活動の中で，文法理解を促すべきであろう。もう一度，授業の中心は「コミュニケーション活動」だということを見直す必要があるかもしれない。

「コミュニケーション活動中心の授業」にするには，目標もコミュニケーション活動に関連していなくてはならない。従来の英語教育は「文法シラバス」が中心であったので，目標もそうであった。例えば，「今日は”be going to”を学びましょう」という目標であった。しかし，「今日は友達に夏休みの予定を言えるようにしよう」という目標にすることで，中心はあくまでもコミュニケーションであるようにする。友達に夏休みの予定を伝えるために「be going to」を使うように指導すれば，目標と一致したコミュニケーション活動ができ，それを評価につなげていくべきであろう。

- ⑤ 前述したように，英語嫌いにさせる大きな要因の一つは「できない」からである。もっと言えば，英語の「発音」や「スペル」が言えない，読めない，書けないからである。確かに英語は日本語と違い，発音と綴りが一致しないことが多い言語である。「あ」と書けば，いつでも「あ」と発音する日本語と違い，英語は「A」と書いても，いつも発音は同じではない。例えば，「ACE」と「APPLE」では「A」の発音は異なる。英語にもある程度の規則性があるのだ

が，やはりある程度の量の英語に触れて身につけるもので，簡単に読めるわけではない。英語の発音と綴りの関係については，初期に学ぶものであるが，その初期に十分に習得できないとそのままズルズルとできないまま学年が上がっていつてしまうことになる。

- ⑥ 「訳」からの脱却が必要である。授業中でも授業外でも「教科書本文を訳す」ことが行われているようである。「訳す」こと自体が悪いわけではない。しかし，「訳す」ことに慣れてしまっていると英語を全て訳さないと理解ができなくなってしまうことがある。また，訳しても内容がわからないということも起こりうる。むしろ，英語は英語のまま理解していく練習をする必要がある。つまり，英語の語順のまま，意味のかたまりを意識して理解していくことである。そこに毎回日本語の介在があると理解が遅くなり，英語を早く処理する練習ができなくなると，「英語脳」を作る妨げとなる場合がある。特に，リスニングにおいてその妨げは顕著になる。リスニングでは，日本語の語順に直して理解している暇はなく，英語を聞いた順に理解していけないと対応できない。これには訓練が必要で，授業中でも授業外でも英語のまま理解する訓練をする必要がある。

- ⑦ 「得意度」と「好意度」に関する英語の認識別4グループ間において，英語学習の意識はかなり違っていることが分かった。「得意好き群」はさまざまな動機によって英語学習に取り組んでいることが分かった。「苦手好き群」は「得意好き群」に似て様々な動機を持っていることが分かった。しかし，英語に対する自己効力感を感じることができていないことが，「得意群」との唯一で大きな違いになっており，「苦手嫌い群」と共通している点である。

このことから，生徒たちがいかに英語に対して自信を持たせることが大切か分かる。生徒は

「できる」と感じなければ、やる気にならない。「できる」を意識して成功体験をたくさん積める授業が望まれる。また、英語は必要であると認識することも自律的学習につながる。「英語は将来必要で、英語でコミュニケーションすることは難しくなく、楽しいものだ」と感じさせることができる教育が今後ますます必要になるであろう。そのために授業の内外で英語でコミュニケーションする様々な機会を設けることで、英語の実用性と有用性を実感させることが大切だろう。

9. 結論と今後の研究の方向性

本研究を通して、中学生の英語の好意度と得意度は英語の学習頻度と学習量に大きな影響を与えていることがわかった。「英語好き」は頻度も量も多く英語学習に取り組むことがわかった。「英語好き」にさせるには英語に対して自信を持たせることが大切である。そのためには、「できる」という成功体験を学習開始初期にできるだけ積ませることが大切である。また、英語学習の意義を教えることも大切なようである。なぜ英語学習が必要なのかをしっかりと自分のものとし、その価値を内在化させている生徒は学習に取り組むようである。

本研究は今後の中学生への指導の方向性を提示する上でとても有意義であるといえるが、具体的な指導に関して教育的示唆を与えるには限界がある。例えば、具体的にどの文法項目に対して、どのような指導法をすべきかの提示はできない。それをするための一つの方法として、文法項目を特定し、それに対して具体的な指導を提示し、その結果を分析する必要がある。今後はそのような研究が行われ、結果を共有してより良い指導法を提案していくことが必要であろう。生徒もそうだが、教員も授業において

多くの「成功体験」が必要なのかもしれない。

〈引用文献〉

- Bandura, A. (2001). Social cognitive theory: An agentic perspective. *Annual Review of Psychology*, 52, 1-26.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York, NY: Plenum Press.
- Dornyei, Z., & Ushioda, E. (2011). *Teaching and researching motivation* (2nd ed.). Harlow: Longman.
- Graham, S. (1994). Classroom motivation from an attributional perspective. In O'Neil, H. F. Jr., & Drillings, M. (Eds.), *Motivation: Theory and research* (pp. 31-48). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum
- Kaneko, Y., & Otoshi, J. (2012). Exploring Causal Relationships between Attitudes toward English Education in Elementary Schools and English Learning Motivation: Based on a Survey of Current Teachers and Prospective Teachers. *Studies in Comparative Culture*, 101, 63-77
- Yashima, T. (2009). International posture and the ideal L2 self in the Japanese EFL contexts. In Z. Dornyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language, identity and the L2 self* (pp. 140-163). NY: Multilingual Matters.
- Benesse 教育研究開発センター (2012) 「小・中学校の英語教育に関する調査～中学1年生の目から見た英語教育とは?～速報版」東京: ベネッセコーポレーション. <http://berd.benesse.jp/global/research/detail.php?id=3178>
- Benesse 教育研究開発センター (2014) 「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」東京: ベネッセコーポレーション. <http://berd.benesse.jp/global/research/detail.php?id=4356>
- 及川 賢 (2017). 「小中における英語授業好感の変化に影響を及ぼす要因」『関東甲信越英語教育学会会誌』第31号, 71-84
- 金子 義隆 (2017). 「英語好感度・得意度と学習動機の関係——中学生意識調査の分析を通して——」関東甲信越英語教育学会第41回新潟研究大会発表要綱, 66
- 文部科学省 (2017). 『中学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』東京: 開隆堂